

阿Q正伝

魯迅

井上紅梅訳



第一章 序

わたしは阿Qあきユーの正伝を作ろうとしたのは一年や二年のことではなかつた。けれども作ろうとしながらまた考えなおした。これを見てわたしは立言の人でないことが分る。従来不朽の筆は不朽の人を伝えるもので、人は文に依つて伝えらる。つまり誰某たれそれは誰某たれそれによ靠つて伝えられるのであるから、次第にハッキリしなくなつてくる。そうして阿Qを伝えることになる、思想の上に何か幽霊のようなものがあつて結末があやふやになる。それはそうとこの一篇の朽ち易い文章を作るために、わたしは筆を下すが早い、いろいろの困難を感じた。第一は文章の名目であつた。孔子様の被仰おっしやるには「名前が正しくないと話が

脱線する」と。これは本来極めて注意すべきことで、伝記の名前は列伝、自伝、内伝、外伝、別伝、家伝、小伝などとずいぶん蒼蠅うるさいほどたくさんあるが、惜しいかな皆合わない。

列伝としてみたらどうだろう。この一篇はいろんな偉い人と共に正史の中に排列すべきものではない。自伝とすればどうだろう。わたしは決して阿Qその物でない。外伝とすれば、内伝が無し、また内伝とすれば阿Qは決して神仙ではない。しからば別伝としたらどうだろう。阿Qは大總統の上諭に依つて国史館に宣付せんぷして本伝を立てたことがまだ一度もない。——英国の正史にも博徒列伝というものは決して無いが、文豪ヂッケンスは博徒別伝という本を出した。しかしこれは文豪のやることでわれわれのやることではない。そのほか家伝という言葉もあるが、わたしは阿Qと同じ流れを汲んでいるか、どうかしらん。彼

の子孫にお辞儀されたこともない。小伝とすればあるいはいいかもしれないが、阿Qは別に大伝たいでんというものが無い。煎じ詰めるとこの一篇は本伝というべきものだが、わたしの文章の著想ちやくそくからいうと文体が下卑ひげていて「車を引いて漿のりを売る人達」が使う言葉を用いているから、そんな僭越けんえつな名目はつかえない。そこで三教九流の数に入いらない小説家のいわゆる「閑話休題、言歸正伝」という紋切型の中から「正伝」という二字を取出して名目とした。すなわち古人が撰せんじた書法正伝のそれに、文字もんじの上から見るとはなはだ紛まらしいが、もうどうでもいい。

第二、伝記を書くには通例、しよつぱなに「何某、あぎなは何、どこそこの人也」とするのが当りまえだが、わたしは阿Qの姓が何というか少しも知らない。一度彼は趙ちやうと名乗っていたようであったが、それも二日目にはあいまいになつた。

それは趙太爺だんなの息子が秀才になつた時の事であつた。阿Qはちようど二碗の黄酒うわんちゆを飲み干して足踏み手振りして言つた。これで彼も非常な面目を施した、というのは彼と趙太爺はもともと一家の分れで、こまかく穿鑿せんさくすると、彼は秀才よりも目上だと語つた。この時そばに聴いていた人達は肅然としていささか敬意を払つた。ところが二日目には村役人が阿Qを喚よびに来て趙家に連れて行つた。趙太爺は彼を一目見ると顔じゆう真赤まっかにして怒鳴つた。

「阿Q！ キサマは何とぬかした。お前が乃公おれの御本家か。たわけめ」

阿Qは黙つていた。

趙太爺は見れば見るほど癩に障つて二三歩前に押し出し「出鱈目でたらめもいい加減にしろ。お前のような奴が一家にあるわけがない。

お前の姓は趙というのか」

阿Qは黙つて身を後ろに引こうとした時、趙太爺は早くも飛びかかつて、ぴしゃりと一つ呉くれた。

「お前は、どうして趙という姓がわかった。どこからその姓を分けた」

阿Qは彼が趙姓である確証を弁解もせず、ただ手を以て左の頬を撫でながら村役人と一緒に退出した。外へ出るとまた村役人から一通りお小言をきいて、二百文の酒手を出して村役人にお詫びをした。この話を聴いた者は皆言つた。阿Qは実に出鱈目な奴だ。自分で擲なぐられるようなことを仕出かしたんだ。彼は趙だか何だか知れたもんじゃやない。よし本当に趙であっても、趙太爺がここにゐる以上は、そんなたわごとを言つてはけしからん。それからというものは彼の名氏みょうじを持ち出す者が無くなつ

て、阿Qは遂に何姓であるか、突きとめることが出来なかつた。

第三、わたしはまた、阿Qの名前をどう書いていいか知らない。彼が生きている間は、人は皆阿Queiと呼んだ。死んだあとではもう誰一人阿Queiの噂をする者がないので、どうして「これを竹帛ちくはくに著す」ことが出来よう。「これ竹帛に著す」ことから言えば、この一篇の文章が皮切であるから、まず、第一の難関にぶつかるのである。わたしはつくづく考えてみると、阿Queiは、阿桂あくいあるいは阿貴あくいかもしれない。もし彼に月亭げつていという号があつてあるいは生れた月日が八月の中頃であつたなら、それこそ阿桂に違いない。しかし彼には号がない。——号があつたかもしれないが、それを知っている人は無い。——そうして生年月日を書いた手帖などどこにも残っていないのだから、阿桂ときめてしまうのはあんまり乱暴だ。

もしまた彼に一人の兄弟があつて阿富あふと名乗つていたら、それこそきつと阿貴に違いない。しかし彼は全くの独り者であつてみると、阿貴とすべき左証がない。その他 Quer と発音する文字もんじは皆へんてこ変てこ積こな意味が含まれいつそう嵌はまりが悪い。以前わたしは趙太爺せがれの倅もさいの茂才先生に訊いてみたが、あれほど物に詳しい人でも遂に返答が出来なかつた。しかし結論から言えば、陳獨秀ちんどくしゅうが雑誌「新青年」を発行して羅馬字ローマを提唱したので国粹こくすいが亡ほろびて考えようが無くなつたんだ。そこでわたしの最後の手段はあつた。同郷生に頼んで、阿Q事件の判決文を調べてもらうより外ほかはなかつた。そうして一ヶ月たつてようやく返辞へんじが来たのを見ると、判決文の中に阿 Quer の音に近い者は決して無いという事だつた。わたし自身としては本当にそれが無いということとは言えないが、もうこの上は調べようがない。そこで、注音字母ちゅうおんじふで

は一般に解るまいと思つて拠所なく洋字を用い、英国流行の
法で彼を阿 Quer と書し、更に省略して阿Qとした。これは近
頃「新青年」に盲従したことで我ながら遺憾に思うが、しかし
茂才先生でさえ知らないものを、わたしどもに何のいい智慧が
出よう？

第四は阿Qの原籍だ。もし彼が趙姓であつたなら、現在よく
用いらるる郡望まつりの旧例に拠り、郡名ぐんめいひやつかせい百家姓に書いてある注解通
りにすればいい。「隴西ろうせいいてんすい天水の人也」といえば済む。しかし惜し
いかな、その姓がはなはだ信用が出来ないので、したがつて原
籍も決定することが出来ない。彼は未莊みそうに住んだことが多いが
ときどき他処たしよへ住むこともある。もしこれを「未莊の人也」と
いえばやはり史伝の法則そむに乖く。

わたしが幾分自分で慰められることは、たつた一つの阿の字

が非常に正確であつた。こればかりはこじつけやかこつけではない。誰が見てもかなり正しいものである。その他のことになると学問の低いわたしには何もかも突き止めることが出来ない。ただ一つの希望は「歴史癖と考証好^{ずき}」で有名な胡適^{こてきし}之先生の門人等^らが、ひよつとすると将来幾多の新端緒^{たんしよ}を尋ね出すかもしれない。しかしその時にはもう阿Q正伝は消滅しているかもしれない。

第二章 優勝記略

阿Qは姓名も原籍も少々あいまいであつた。のみならず彼の前半生の「行状」もまたあいまいであつた。それというのも未荘の人達はただ阿Qをコキ使い、ただ彼をおもちやにして、も

とより彼の「行状」などに興味を持つ者が無い。そして阿Q自身も身の上話などしたことはない。ときたま人と喧嘩をした時、何かのはずみに目を瞠みはつて

「乃公達だつて以前は——てめえよりやよツぽど豪勢なもんだぞ。人をなんだと思つていやがるんだえ」というくらいが勢せい一杯だ。

阿Qは家が無い。未荘の土穀祠おいなりさまの中に住んでいて一定の職業もないが、人に頼まれると日傭取ひようとりになつて、麦をひけと言われれば麦をひき、米を搗つけと言われれば米を搗き、船を漕こげと言われれば船を漕ぐ。仕事が余る時には、臨時に主人の家に寝泊りして、済んでしまえばすぐに出て行くゆ。だから人は忙せわしない時には阿Qを想い出すが、それも仕事のことであつて「行状」のことでは決して無い。いったん暇になれば阿Qも糸瓜へちまもないの

だから、彼の行状のことなどなおさら言い出す者がない。しかし一度こんなことがあった。あるお爺さんが阿Qをもちゃげて「お前は何をさせてもソツが無いね」と言った。この時、阿Qは臂ひじを丸出しにして（支那チョッキをじかに一枚著ている）無性ぶしょう臭い見すばらしい風体で、お爺さんの前に立っていた。はたの者はこの話を本気にせず、やつぱりひやかしたと思っていたが、阿Qは大層喜んだ。

阿Qはまた大層己惚うぬぼれが強く、未莊の人などはてんで彼の眼中にない。ひどいことには二人の「文童ぶんどう」に対しても、一笑の価値さえ認めていなかった。そもそも「文童ぶんどう」なる者は、将来秀才となる可能性があるもので、趙太爺や錢太爺せんだんなが居民の尊敬を受けているのは、お金がある事の外ほかに、いずれも文童の父であるからだ。しかし阿Qの精神には格別の尊念が起らない。彼は

想つた。乃公だつて倅せがれがあればもつと偉くなつてゐるぞ！ 城内に幾度も行つた彼は自然己惚れが強くなつてゐたが、それではないながらまた城内の人をさげすんでいた。たとえば長さ三尺幅しゃく三寸の木の板で作つた腰掛は、未荘では「長登チャンテン」といい、彼もまたそう言つてゐるが、城内の人が「条登デョーテン」というのと、これは間違いだ。おかしなことだ、と彼は思つてゐる。鱮たらの煮浸にびたしは未荘では五分切の葱の葉を入れるのであるが、城内では葱を糸切りにして入れる。これも間違いだ、おかしなことだ、と彼は思つてゐる。ところが未荘の人はまったくの世間見ずで笑うべき田舎者だ。彼等は城内の煮魚さえ見たことがない。

阿Qは「以前は豪勢なもん」で見識が高く、そのうえ「何をさせてもソツがない」のだから、ほとんど一いっぱしの人物と言つてもいいくらいのものだが、惜しいことに、彼は體質上少々欠点

があつた。とりわけ人に嫌らわれるのは、彼の頭の皮の表面にいつ出来たものかずいぶん幾個所も瘡だらけの禿があつた。これは彼の持物であるが、彼のおもわくを見るとあんまりいいものでもないらしく、彼は「癩」という言葉を嫌つて一切「頼」に近い音までも嫌つた。あとではそれを推しひろめて「亮」もいけない。「光」もいけない。その後また「燈」も「燭」も皆いけなくなつた。そういう言葉をちよつとでも洩そうものなら、それが故意であろうと無かろうと、阿Qはたちまち頭じゆうの禿を真赤にして怒り出し、相手を見積つて、無口の奴は言い負かし、弱そうな奴は擲りつけた。しかしどういふものかしらん、結局阿Qがやられてしまうことが多く、彼はだんだん方針を變更し、大抵の場合は目を怒らして睨んだ。

ところがこの怒目主義を採用してから、未莊のひま人はいよ

いよ附け上がつて彼を嬲り物にした。ちよつと彼の顔を見ると
彼等はわざとおツたまげて

「おや、明るくなつて来たよ」

阿Qはいつもの通り目を怒らして睨むと、彼等は一向平気で
「と思つたら、空気ランプがここにある」

アハハハハと皆は一緒になつて笑つた。阿Qは仕方なしに
他の復讐の話をして

「てめえ達は、やつぱり相手にならねえ」

この時こそ、彼の頭の上には一種高尚なる光榮ある禿がある
のだ。ふだんの斑まだら禿とは違う。だが前にも言つたとおり阿Q
は見識がある。彼はすぐに規則違犯を感じいて、もうその先き
は言わない。

閑人ひまじん達はまだやめないで彼をあしらつてしていると、遂に打ち

合いになる。阿Qは形式上負かされて黄いろい辮子を引張られ、壁に対して四つ五つ鉢合せを頂戴し、閑人はようやく胸をすかして勝ち慢ほこつて立去る。

阿Qはしばらく佇んでいたが、心の中で思った。「乃公は「つまり子供に打たれたんだ。今の世の中は全く成っていない……」そこで彼も満足し勝ち慢ほこつて立去る。

阿Qは最初この事を心の中で思っていたが、遂にはいつも口へ出して言った。だから阿Qとふざける者は、彼に精神上の勝利法があることをほとんど皆知ってしまった。そこで今度彼の黄いろい辮子を引拵ひつつかむ機会が来るとその人はまず彼に言った。

「阿Q、これでも子供が親爺おやじを打つのか。さあどうだ。人が畜生を打つんだぞ。自分で言え、人が畜生を打つと」

阿Qは自分の辮子で自分の両手を縛られながら、頭を歪めて

言つた。

「虫ケラを打つを言えばいいだろう。わしは虫ケラだ。——まだ放さないのか」

だが虫ケラと言つても閑人は決して放さなかつた。いつもの通り、ごく近くのだどこかの壁に彼の頭を五つ六つぶつつけて、そこで初めてせいせいして勝ち慢ほこつて立去る。彼はそう思つた。今度こそ阿Qは凹へこた垂れたと。

ところが十秒もたたないうちに阿Qも満足して勝ち慢ほこつて立去る。阿Qは悟つた。乃公みずかは自ら軽みんじ自ら賤いやしむことの出来る第一の人間だ。そういうことが解らない者は別として、その外の者に対しては「第一」だ。状元じょうげんもまた第一人じゃないか。「人を何だと思つていやがるんだえ」

阿Qはこういう種々の妙法を以て怨敵を退散せしめたあとで

は、いつそ愉快になつて酒屋に馳けつけ、何杯か酒を飲むうちに、また別の人と一通り冗談を言つて一通り喧嘩をして、また勝ち慢ほこつて愉快になつて、土穀祠おいなりさまに帰り、頭を横にするが早いか、ぐうぐう睡ねむつてしまうのである。

もしお金があれば彼は博奕ぼくちを打ちに行く。一かたまりの人が地面にしゃがんでいる。阿Qはその中に割込んで一番威勢のいい声を出している。

「ちんろんすーば
青竜四百！」

「よし……あける……ぞ」

堂元は蓋を取つて顔じゆう汗だらけになつて唱うたい始める。

「てんもんあた
天門当り——隅返し、人と、中張張手無し——阿Qの銭ぜにはお

取上げ——」

「なかばりひやくもん
中張百文——よし百五十文張もんつたぞ」

阿Qの銭はこのような吟詠のもとに、だんだん顔じゆう汗だらけの人の腰の辺に行つてしまふ。彼は遂にやむをえず、かたまりの外へ出て、後ろの方に立つて人の事で心配しているうちに、博奕ばくちはずんずん進行してお終しまいになる。それから彼は未練らしく土穀祠おいなりさまに帰り、翌日は眼のふちを腫らしながら仕事に出る。

けれど「塞翁さいおうが馬を無くしても、災難と極きまったものではない」。阿Qは不幸にして一度勝つたが、かえつてそれがためにほとんど大きな失敗をした。

それは未荘の祭の晩だった。その晩例に依つて芝居があつた。例に依つてたくさんの博奕場ばくちばが舞台の左側に出た。囃はやしの声などは阿Qの耳から十里の外へ去つていた。彼はただ堂元の歌の節だけ聴いていた。彼は勝つた。また勝つた。銅貨は小銀貨とな

り、小銀貨は大洋だいやんになり、大洋は遂に積みかさなつた。彼は素敵な勢いで「天門てんもん両塊りやんかい」と叫んだ。

誰と誰が何で喧嘩を始めたんだか、サツパリ解らなかつた。怒鳴るやら殴るやら、バタバタ馳け出す音などがしてしばらくの間眼が眩んでしまつた。彼が起き上つた時には博奕場も無ければ人も無かつた。身中みうちにかなりの痛みを覚えて幾つも拳骨を食い、幾つも蹶け飛ばされたようであつた。彼はぼんやりしながら歩き出して土穀祠おいなりさまに入つた。気がついてみると、あれほどあつた彼のお金は一枚も無かつた。博奕場にいた者はたいていこの村の者では無かつた。どこへ行つて訊き出すにも訊き出しようがなかつた。

まっ白なピカピカした銀貨！ しかもそれが彼の物なんだが今は無い。子供に盗とられたことにしておけばいいが、それじゃ

どうも気が済まない。自分を虫ケラ同様に思えばいいが、それじゃどうも気が済まない。彼は今度こそいささか失敗の苦痛を感じた。けれど彼は失敗を転じて遂に勝ちとした。彼は右手を挙げて自分の面を力任せに引ッぱたいた。すると顔がカツとして火照り出しかなりの痛みを感じたが、心はかえって落ち著いて来た。打つたのはまさに自分に違いないが、打たれたのもう一人の自分のようでもあつた。そうこうするうちに自分が人を打つてるような気持になつた。——やつぱり幾らか火照るには違いないが——心は十分満足して勝ち慢つて横になつた。彼は睡つてしまつた。

第三章 続優勝記略

それはそうと、阿Qはいつも勝っていたが、名前が売れ出したのは、趙太爺の御ちようちやくを受けてからのことだ。

彼は二百文の酒手さかてを村役人に渡してしまふと、ぶんぶん腹を立てて寝転んだ。あとで思いついた。

「今の世界は話にならん。倅が親爺を打つ……」

そこでふと趙太爺の威風を想い出し、それが現在自分の倅だと思ふと我れながら嬉しくなつた。彼が急に起き上つて「若寡婦ごけの墓参り」という歌を唱うたいながら酒屋へ行つた。この時こそ彼は趙太爺よりも一段うわ手の人物に成り済ましていたのだ。

変へんてこ槓なこなこつたがそれからというものは、果してみんなが殊ことの外ほか彼を尊敬するようになった。これは阿Qとしては自分が趙太爺の父親になりすましているのだから当然のことであるが、本当まことの処ところはそうでなかつた。未莊の仕来しきたりでは、阿七あしちが阿八はちを打

つような事があつても、あるいは李四りしが張三ちやうさんを打つても、そんなことは元より問題にならない。ぜひともある名の知れた人、たとえば趙太爺のような人と交渉があつてこそ、初めて彼等の口に端はに掛るのだ。一遍口の端に掛れば、打つても評判になるし、打たれてもそのお蔭様で評判になるのだ。阿Qの思い違いなどもちろんどうでもいいのだ。そのわけは？　つまり趙太爺に間違いのあるはずはなく、阿Qに間違いがあるのに、なぜみんなは殊の外彼を尊敬するようになったか？　これは篋棒べらぼうな話だが、よく考えてみると、阿Qは趙太爺の本家だと言つて打たれたのだから、ひよつとしてそれが本当だったら、彼を尊敬するのは至極穩当な話で、全くそれに越したことはない。でなければまた左さのような意味があるかもしれない。聖廟せいびやうの中のお供物のように、阿Qは猪羊ちやうようと同様の畜生であるが、いったん聖人

のお手がつくと、学者先生、なかなかそれを粗末にしない。

阿Qはそれからというものはずいぶん長いこと偉張^{いば}っていた。

ある年の春であつた。彼はほろ酔い機嫌で町なかを歩いていると、垣根の下の日当りに王鬚^{ワンウー}がもろ肌ぬいで虱^{しらみ}を取つているのを見た。たちまち感じて彼も身体がむず痒^{がゆ}くなつた。この王鬚^{はげがさ}は禿瘡^{はげがさ}でもある上に、鬚^{ひげ}をじじむさく伸ばしていた。阿Qは禿瘡^{はげがさ}の一点は度外に置いているが、とにかく彼を非常に馬鹿にしていた。阿Qの考^{かんがえ}では、外^{ほか}に格別変つたところもないが、その額^{あご}に絡まる鬚^{ひげ}は実にすこぶる珍妙なもので見られたざまじやないと思つた。そこで彼は側^{そば}へ行つて並んで坐つた。これもしほかの人なら阿Qはもちろん滅多に坐るはずはないが、王鬚の前では何の遠慮が要るものか、正直のところ阿Qが坐つたのは、つまり彼を持上げ奉つたのだ。

阿Qは破れ衿あわせを脱ぎおろして一度引ツくらかえして調べてみた。洗ったばかりなんだがやはりぞんざいなものかもしれない。長いことかかつて三つ四つとら捉まえた。彼は王鬚を見ると、一つまた一つ、二つ三つと口の中にほう抛り込んでピチピチパチパチと噛み潰した。

阿Qは最初失望してあとでは不平を起した。王鬚なんて取るに足らねえ奴でも、あんなにどつきり持っていやがる。乃公を見ろ、あるかねえか解りやしねえ。こりやどうも大おおに面目のねえこつた。彼はぜひとひねも大きな奴をひね捫り出そうと思つてあちこち搜した。しばらく経つてやつと一つとら捉まえたのは中くらいの奴で、彼は恨めしそうに厚い脣の中に押込みヤケに噛み潰すと、パチリと音がしたが王鬚の響ひびきには及ばなかつた。

彼は禿瘡の一つ一つを皆赤くして著物を地上に突放し、ペッ

と唾を吐いた。

「この毛虫め」

「やい、瘡かさツかき。てめえは誰の悪口を言うのだ」王鬚は眼を挙げてさげすみながら言った。

阿Qは近頃割合に人の尊敬を受け、自分もいささか高慢こうまん稚氣ちいきになつてゐるが、いつもやり合う人達の面を見ると、やはり心がお怯おれてしまう。ところが今度に限つて非常な勢いきおいだ。何だ、こんな鬚ひげだらけの代物が生意氣い言いやがるとばかりで

「誰のこつたか、おらあ知らねえ」阿Qは立ち上つて、両手を腰の間に支えた。

「この野郎、骨が痒くなつたな」王鬚も立ち上がつて著物を著た。

相手が逃げ出すかと思つたら、掴み掛かつて来たので、阿Qは

拳骨を固めて一突き呉れた。その拳骨がまだ向うの身体からだに届かぬうちに、腕を抑えられ、阿Qはよろよると腰を浮かした。扭じつけられた辮子は墻まがきの方へと引張られて行つて、いつもの通りそこで鉢合せが始まるのだ。

「君子は口を動かして手を動かさず」と阿Qは首を歪めながら言つた。

王鬚は君子でない見え、遠慮会釈もなく彼の頭を五つほど壁にぶつけて力任せに突放すと、阿Qはふらふらと六尺余り遠ざかった。そこで鬚は大に満足して立去つた。

阿Qの記憶ではおおかたこれは生れて初めての屈辱といつてもいい、王鬚は懸あこに絡まる鬚ひげの欠点で前から阿Qに侮られていたが、阿Qを侮つたことは無かつた。むろん手出しなど出来るはずの者ではなかつたが、ところが現在遂に手出しをしたから

妙だ。まさか世間の噂のように皇帝が登用試験をやめて秀才も挙人も不用になり、それで趙家の威風が滅び、それで彼等も阿Qに対して見下すようになったのか。そんなことはありそうにも思われない。

阿Qは抛所なくイんだ。

遠くの方から歩いて来た一人は彼の真正面に向っていた。これも阿Qの大嫌いの一人で、すなわち錢太爺の総領息子だ。彼は以前城内の耶蘇学校に通学していたが、なぜかしらんまた日本へ行った。半年あとで彼が家に帰って来た時には膝が真直ぐになり、頭の上の辮子が無くなっていた。彼の母親は大泣きに泣いて十幾幕も愁歎場を見せた。彼の祖母は三度井戸に飛び込んで三度引上げられた。あとで彼の母親は到処で説明した。

「あの辮子は悪い人から酒に盛りつぶされて剪り取られたんで

す。本来あれがあればこそ大官たいかんになれるんですが、今となつては仕方ありません。長く伸びるのを待つばかりです」

さはいえ阿Qは承知せず、一途に彼を「偽毛唐けとう」「外国人の犬」と思い込み、彼を見るたんびに肚はらの中で罵ののしり悪にくんだ。

阿Qが最も忌み嫌つたのは、彼の一本のまがい辮子だ。擬まがい物と来てはそれこそ人間の資格がない。彼の祖母が四度目よどの投身をしなかつたのは善良の女でないと阿Qは思った。

その「偽毛唐」が今近づいて来た。「禿はげ、驢ろ……」阿Qは今まで肚の中で罵るだけで口へ出して言ったことはなかつたが、今度は正義いきておの憤りでもあるし、復讐の観念もあつたかた、思わぬ知らず出てしまった。

ところがこの禿の奴、一本のニス塗りのステッキを持っていて——それこそ阿Qに言わせると葬式の泣き杖づえだ——大跨おおまたに歩

いて来た。この一刹那せつなに阿Qは打たれるような気がして、筋骨ひきしを引締め肩そびやを聳かして待つていると果して

ピシヤリ。

確かに自分の頭に違いない。

「あいつのことを言ったんです」と阿Qは、側そばに遊んでいる一人の子供を指さした。

ピシヤリ、ピシヤリ。

阿Qの記憶ではおおかたこれが今までであった第二の屈辱といつてもいい。幸いピシヤリ、ピシヤリの響ひびきのあとは、彼に関する一事件が完了したように、かえつて非常に気楽になった。それにまた「すぐ忘れてしまう」という先祖伝来の宝物が利き目をあらわし、ぶらぶら歩いて酒屋の門口かどぐちまで来た時にはもうさぶる元気なものであった。

折柄おりから向うから来たのは、靜修庵せいしゅうあんの若い尼であつた。阿Qはふだんでも彼女を見るときつと悪態を吐くのだ。ましてや屈辱てきがいしんのあとだつたから、いつものことを想い出すと共に敵愾よびおこ心を喚起した。

「きようはなぜこんなに運が悪いかと思つたら、さてこそためえを見たからだ」と彼は独りでそう極めて、わざと彼女にきこえるように大唾を吐いた。

「ペツ、プツ」

若い尼は皆目かひもく眼も呉れず頭をさげてひたすら歩いた。すれちがいに阿Qは突然手を伸ばして彼女の剃り立ての頭を撫でた。

「から坊主！ 早く帰れ。和尚が待つてゐるぞ」

「お前は何だつて手出しをするの」

尼は顔じゆう真赤にして早足で歩き出した。

酒屋の中の人は大笑いした。己れの手柄を認めた阿Qはますますいい気になつてハシヤギ出した。

「和尚はやるかもしれないねえが、おらあやらねえ」彼は、彼女の頬ほっぺたを摘つまんだ。

酒屋の中の人はまた大笑いした。阿Qはいつそう得意になり、見物人を満足させるために力任せに一捻りして彼女を突放した。彼はこの一戦で王鬚のことも偽毛唐のことも皆忘れてしまつて、きょうの一切の不運が報いられたように見えた。不思議なことにはピシヤリ、ピシヤリのあの時よりも全身が軽く爽やかになつて、ふらふらと今にも飛び出しそうに見えた。

「阿Qの罰ばち当りめ。お前の世継たぎは断たえてしまふぞ」遠くの方で尼の泣声がきこえた。

「ハハハ」阿Qは十分得意になつた。

「ハハハ」酒屋の中の人も九分通り得意になって笑った。

第四章 恋愛の悲劇

こういう人があつた。勝利者というものは、相手が虎のような鷹のようなものであれかしと願ひ、それでこそ彼は初めて勝利の歓喜を感じるのだ。もし相手が羊のようなものだったら、彼はかえつて勝利の無聊むりょうを感じる。また勝利者というものは、一切を征服したあとで死ぬものは死に、降くだるものは降つて、しんせいこうせいぎようしざいしざい「臣誠惶誠恐死罪死罪」というような状態になると、彼は敵が無くなり相手が無くなり友達が無くなり、たった一人上にいる自分だけが別物になつて、すさま凄じく淋しくかえつて勝利者の悲哀を感じる。ところが我が阿Qにおいてはこのような欠乏はなかつ

た。ひよつとするとこれは支那しなの精神文明が全球第一である一つの証拠かもしれない。

見たまえ。彼はふらりふらりと今にも飛び出しそうな様子だ。

しかしながらこの一回の勝利がいささか異様な変化を彼に与えた。彼はしばらくの間ふらりふらりと飛んでいたが、やがてまたふらりと土穀祠おいなりさまに入った。常例に拠るとそこですぐ横になつて軒いびきをかくんだが、どうしたものかその晩に限つて少しも睡れない。彼は自分の親指と人差指がいつもよりも大層脂漲あぶらぎつて変な感じがした。若い尼の顔の上の脂が彼の指先に粘りついたのかもしれない。それともまた彼の指先が尼の面つらの皮にこすられてすべつこくなつたのかもしれない。

「阿Qの罰当りめ。お前の世嗣よつぎは断たえてしまふぞ」

阿Qの耳朶みみたぶの中にはこの声が確かに聞えていた。彼はそう想つ

た。

「ちげえねえ。一人の女があればこそだ。子が断え孫が断えてしまつたら、死んだあとで一碗の御飯を供える者がない。……一人の女があればこそだ」

一体「不孝には三つの種類があつて後嗣あとつぎが無いのが一番悪い、そのうえ「若敖之鬼餒而」むえんぼとけのひぼしこれもまた人生の一大悲哀だ。だから彼もそう考えて、実際どれもこれも聖賢の教おしえに合致していることをやつたんだが、ただ惜しいことに、後になつてから「心の駒を引き締めることが出来なかつた」

「女、女……」と彼は想つた。

「……和尚ようし（陽器）は動く。女、女！……女！」と彼は想つた。われわれはその晚いつ時分になつて、阿Qがようやく麩をかいたかを知ることが出来ないが、とにかくそれからというもの

は彼の指先に女の脂がこびりついて、どうしても「女！」を思わずにはいられなかつた。

たつたこれだけでも、女というものは人に害を与える代物しろものだと知ればいい。

支那の男は本来、大抵皆聖賢となる資格があるが、惜しいかな大抵皆女のために壊こわされてしまう。商しょうは妲己だつきのために騒動さわどうがもちあがつた。周しゅうは褒姒ほうじのために破壊はかいされた？ 秦……公然歴史に出ていないが、女のために秦は破壊されたといつても大して間違いはあるまい。そうして董卓とうたくは貂蟬てんぜんのために確実に殺された。

阿Qは本来正しい人だ。われわれは彼がどんな師匠おしえに就いて教おしえを受けたか知らないが、彼はふだん「男女の区別」を厳守し、かつまた異端を排斥する正気せいぎがあつた。たとえば尼、偽毛唐の

類るい。——彼の学説では凡ての尼は和尚と私通している。女が外へ出れば必ず男を誘惑しようと思う。男と女と話をすればきつと碌なことはない。彼は彼等を懲かんがえしめる考で、おりおり目を怒らせて眺め、あるいは大声をあげて彼等の迷いを醒さまし、あるいは密会所に小石を投げ込むこともある。

ところが彼は三十になつて竟つひに若い尼になやまされて、ふらふらになった。このふらふらの精神は礼教上れいきょうから言うて決してよくないものである。——だから女は真まに悪にくむべきものだ。もし尼の顔が脂漲あぶらあふつていなければなら阿Qは魅せられずに済んだろう。もし尼の顔に覆面が掛つていたら阿Qは魅せられずに済んだろう——彼は五六年前ぜん、舞台の下の人混みひとごの中で一度ある女の股倉またくらに足を挟まれたが、幸いズボンを隔へていたので、ふらふらになるようなことはなかった。ところが今度の若い尼は決

してそうではなかつた。これを見てもいかに異端の悪むべきかを知るべし。

彼は「こいつはきつと男を連れ出すわえ」と思うような女に對していつも注意してみていたが、彼女は決して彼に向つて笑いもしなかつた。彼は自分と話をする女の言葉をいつも注意して聴いていたが、彼女は決して艶つやッぽい話を持ち出さなかつた。おおこれが女の悪むべき点だ。彼等は皆「偽道德」を著きっていた。そう思いながら阿Qは

「女、女!……」と想つた。

その日阿Qは趙太爺の家うちで一日米を搗いた。晩飯が済んでしまふと台所で煙草を吸つた。これがもしほかの家なら晩飯が済んでしまふとすぐに帰るのだが趙家は晩飯が早い。定例じようれいに抛るとこの場合点燈を許さず、飯が済むとすぐ寝てしまふのだが、

端無くもまた二三の例外があつた。

その一は趙太爺が、まだ秀才に入らぬ頃、燈あかりを点じて文章を読むことを許された。その二は阿Qが日雇いに来る時は燈を点じて米搗くことを許された。この例外の第二に依つて、阿Qが米搗きに著手ちやくしゆする前に台所で煙草を吸つていたのだ。

呉媽ウーマは、趙家うちちの中でたった一人の女僕じよぼくであつた。皿小鉢を洗つてしまふと彼女もまた腰掛の上に坐して阿Qと無駄話をした。

「奥さんはきょうで二日御飯をあがらないのですよ。だから旦那ちいさいは小妾ちいさいのを一人買おうと思つてゐるんです」

「女……呉媽……このチビごけ」と阿Qは思った。

「うちの若奥さんは八月になると、赤ちゃんが生れるの」

「女……」と阿Qは想つた。

阿Qは煙管きせるを置いて立上つた。

「内の若奥さんは……」と呉媽はまだ喋舌しゃべっていた。

「乃公とお前と寝よう。乃公とお前と寝よう」

阿Qはたちまち強要と出掛け、彼女に対してひざまずいた。

一刹那せつな、極めて森閑しんかんとしていた。

呉媽はしばらく神威しんいに打たれていたが、やがてガタガタ顫え出した。

「あれーッ」

彼女は大声上げて外へ馳かけ出し、馳かけ出しながら怒鳴っていたが、だんだんそれが泣声なきこゑに変わって来た。

阿Qは壁むかに對むかつて跪坐きざし、これも神威しんいに打たれていたが、この時両手ていをついて無性ぶじようらしく腰を上げ、いささか沫あわを食ったような体ていでドギマギしながら、帯の間に煙管を挿し込み、これから米搗ゆきに行ゆこうかどうしようかとまごまごしているところへ、

ポカリと一つ、太い物が頭の上から落ちて来た。彼はハツとして身を転じると、秀才は竹の棒キレをもつて行手を塞いだ。

「キサマは謀叛むほんを起したな。これ、こん畜生………」

竹の棒はまた彼に向つて振り下された。彼は両手を挙げて頭をかかえた。当つたところはちようど指の節の真上で、それこそ本当に痛く、夢中になつて台所を飛び出し、門を出る時また一つ背中の上をどやされた。

「忘八蛋ワンパダン」

後ろの方で秀才が官話かんわを用いて罵る声が聞えた。

阿Qは米搗場に駈かけ込んで独り突立っていると、指先の痛みはまだやまず、それにまた「忘八蛋ワンパダン」という言葉が妙に頭に残つて薄気味悪く感じた。この言葉は未荘の田舎者はかつて使つたことがなく、専もっぱらお役所のお歴々れきれきが用ゆるもので印象が殊の外

深く、彼の「女」という思想など、急にどこへか吹っ飛んでしまった。しかし、ぶつ叩かれてしまえば事件が落著して何の障さわりがないのだから、すぐに手を動かして米を搗き始め、しばらく搗いていると身内が熱くなって来たので、手をやすめて著物きものをぬいだ。

著物きものを脱ぎおろした時、外の方が大変騒々しくなつて来た。

阿Qは自体賑やかなことが好きで、声を聞くとすぐに声のある方へ馳かけ出して行つた。だんだん側そばへ行つてみると、趙太爺の庭内でたそがれの中ではあるが、大勢集あつまつてゐる人の顔の見分けも出来た。まず目につくのは趙家のうちじゅうの者と二日も御飯を食べないでゐる若奥さんの顔も見えた。他に隣の鄒七嫂すうしちそうや本当の本家の趙白眼ちようはくがん、趙司晨ちようししんなどもいた。

若奥さんは下部屋しもべやからちようど呉媽を引張り出して来たところ

ろで

「お前はよそから来た者だ……自分の部屋に引込んでいてはいけない……」

鄒七嫂も側そばから口を出し

「誰だってお前の潔白を知らない者はありません……決して気短なことをしてはいけません」といった。

呉媽はひた泣きに泣いて、何か言っていたが聞き取れなかった。

阿Qは想った。「ふん、面白い。このチビごけが、どんな悪戯いたづらをするかしらんで？」

彼は立聴きしようと思つて趙司晨の側そばまでゆくと、趙太爺は大きな竹の棒を手に持つて彼を目蒐めがけて跳び出して来た。

阿Qは竹の棒を見ると、この騒動が自分が前に打たれた事と

関係があるんだと感づいて、急に米搗場に逃げ帰ろうとしたが、竹の棒は意地悪く彼の行手を遮った。そこで自然の成行きに任せて裏門から逃げ出し、ちよつとの間に彼はもう土穀祠おいなりさまの宮の中にいた。阿Qは坐っていると肌が粟立あわだつて来た。彼は冷たく感づいたので。春とはいえ夜になると残りの寒さが身に沁しみ、裸でいられるものではない。彼は趙家に置いて来た上衣うわぎがつくづく欲しくなつたが、取りに行けば秀才の恐ろしい竹の棒がある。そうこうしているうちに村役人が入つて来た。

「阿Q、お前のお袋のようなものだけ。趙家の者にお前がふぎけたのは、つまり目上を犯したんだ。お蔭で乃公はゆうべ寝ることが出来なかつた。お前のお袋のようなものだけ」

こんな風に通り教訓されたが、阿Qはもちろん黙っていた。拳句の果てに、夜だから役人の酒手を倍増しにして四百文出す

のあたりまえが当前だということになった。阿Qは今持合せがないから一つの帽子を質に入れて、五つの条件を契約した。

一、みょうにちえにろうそく明日紅蠟燭一对（目方一斤の物に限る）線香一封を趙家に持参して謝罪する事。

二、趙家では道士を喚んで首縊りの幽霊を祓う事（首縊幽霊は最も獰猛なる悪鬼あくぎで、阿Qが女を口説いたのもその祟りだと仮想する）。費用は阿Qの負担とす。

三、阿Qは今後決して趙家のしきい鬪を越えぬ事。

四、呉媽に今後意外の変事があつた時には、阿Qの責任とす。

五、阿Qは手間賃と裕を要求することを得ず。

阿Qはもちろん皆承諾したが、困つたことにはお金が無い。

幸い春でもあるし、要らなくなつた棉わた入れを二千文に質入れして契約を履行した。そうして裸になつてお辞儀をしたあとは、確かに幾文いくもんか残つたが、彼はもう帽子を請け出そうとも思わず、あるだけのものは皆酒にして思い切りよく飲んでしまった。

一方趙家では、蠟燭も線香もつかわずに、大奥さんが仏参ぶつさんの日まで蔵しまつておいた。そうしてあの破れ上衣の大半は若奥さんが八月生んだ赤坊あかんぼうのおしめになつて、その切屑は呉媽の鞋底くつぞこに使われた。

第五章 生計問題

阿Qはお礼を済ましてもとのお廟みやに帰つて来ると、太陽は下りてしまい、だんだん世の中が変になつて来た。彼は一々想

廻した結果ついに悟るところがあつた。その原因はつまり自分の裸にあるので、彼は破れ衾がまだ一枚残っていることを想い出し、それを引掛けて横になつて眼を開けてみると太陽はまだ西の墻まがきを照しているのだ。彼は起き上りながら「お袋のようなものだ」と言つてみた。

彼はそれからまたいつものように街に出て遊んだ。裸者の身を切るようなつらさはないが、だんだん世の中が変に感じて来た。何か知らんが未荘の女はその日から彼を気味悪がつた。彼等は阿Qを見ると皆門の中へ逃げ込んだ。極端なことには五十に近い鄒七嫂まで人のあとに跟ついて潜り込み、その上十一になる女の児こを喚び入れた。阿Qは不思議でたまらない。「こいつ等はどれもこれもお嬢さんのようなしなしていやがる。なんだ、売淫ばいため」

阿Qはこらえ切れなくなつてお馴染の家に行つて探りを入れ
た。——ただし趙家の鬪だけは跨ぐことが出来ない——何しろ
様子がすこぶる変なので、どこでもきつと男が出て来て、蒼蠅
そんな顔付を見せ、まるで乞食を追払うような体裁で

「無いよ無いよ。向うへ行つてくれ」と手を振つた。

阿Qはいよいよ不思議に感じた。

この辺の家は前から手伝が要るはずなんだが、今急に暇にな
るわけがない。こりやあきつと何か曰くがあるはずだ、と氣を
つけてみると、彼等は用のある時には小DONをよんでいた。
この小Dはごくごくみすばらしい奴で痩せ衰えていた。阿Qの
眼から見ると王鬚よりも劣っている。ところがこの小わッぱめ
が遂に阿Qの飯碗を取つてしまつたんだから、阿Qの怒尋常一
様のものではない。彼はぶんぶんしながら歩き出した。そうし

てたちまち手をあげて呻うなった。

「鉄の鞭で手前を引ッぱたくぞ」

幾日かのあとで、彼は遂に錢府せんぷの照壁せうへき（衝立ついたての壁）の前で小

Dにめぐり逢った。「讎かたきの出会いは格別ハッキリ見える」もの

で、彼ははずか小Dの前ゆに行くと小Dも立止つった。

「畜生！」阿Qは眼かどに稜かどを立て口の端あわへ沫あわを吹き出した。

「俺は虫ケラだよ。いいじゃねえか……」と小Dは言った。

したででに出られて阿Qはかえつて腹はらを立てた。彼の手には鉄の鞭むちが無なかった。そこでただ殴うるより仕様がなかった。彼は手を伸のして小Dの辮おん子を引ひ掴つかむと、小Dは片ッぽの手で自分の辮根べんこんを守り、片ッぽの手で阿Qの辮おん子を掴つかんだ。阿Qもまた空そらいている方の手で自分の辮根べんこんを守まもった。

以前の阿Qの勢いきおいを見ると小Dなど問題もならないが、近頃

彼は飢餓のため痩せ衰えているので五分々々の取組となった。四つの手は二つの頭を引搦んで双方腰を曲げ、半時間の久しきに渡って、錢府の白壁の上に一組の藍色の虹形にじがたを映出えいしゅつした。「いいよ。いいよ」見ていた人達はおおかた仲裁する積りで言ったのであろう。

「よし、よし」見ている人達は、仲裁するのか、ほめるのか、それとも煽おだてるのかしらん。

それはそうと二人は人のことなど耳にも入らなかつた。阿Qが三步進むと小Dは三步退しりぞき、遂に二人とも突立った。小Dが三步進むと阿Qは三步退き、遂にまた二人とも突立った。およそ半時間……未荘には時計がないからハッキリしたことは言えない。あるいは二十分かもしれない……彼等の頭はいずれも埃がかかって、額の上には汗が流れていた。そうして阿Qが手を

放した間際に小Dも手を放した。同じ時に立上つて同じ時に身を引いてどちらも人ごみの中に入った。

「覚えていろ、馬鹿野郎」阿Qは言った。

「馬鹿野郎、覚えていろ」小Dもまた振向いて言った。

この一幕の「竜虎図」は全く勝敗がないと言つていくくらいひとまくのものだが、見物人は満足したかしらん、誰たれも何とも批評するものもない。そうして阿Qは依然として仕事に頼まれなかつた。

ある日非常に暖かで風がそよそよと吹いてだいぶ夏らしくなつて来たが、阿Qはかえつて寒さを感じた。しかしこれにはいろいろのわけがある。第一腹が耗へつて蒲団も帽子も上衣うわぎもないのだ。今度棉入れを売つてしまうと、禪子ズボンは残つているが、こればかりは脱ぐわけには行ゆかない。破れ衾ふしが一枚あるが、これも人にやれば鞋底の資料になつても、決してお金にはならない。

彼は往來でお金を拾う予定で、とうから心掛けていたが、まだめつからない。家の中を見廻したところで何一つない。彼は遂におもてへ出て食を求めた。

彼は往來を歩きながら「食を求め」なければならぬ。見馴れた酒屋を見て、見馴れた饅頭を見て、ずんずん通り越した。立ちどまりもしなければ欲しいとも思わなかつた。彼の求むるものはこの様なものではなかつた。彼の求むるものは何だろう。彼自身も知らなかつた。

未荘はもとより大きな村でもないから、まもなく行き^ゆ尽してしまつた。村端^{はず}れは大抵水田であつた^三。見渡す限りの新稲^{しんいね}の若葉の中に幾つか丸形の活動の黒点が挟まれているのは、田を耕す農夫であつた。阿Qはこの田家^{でんか}の楽しみを鑑賞せずひたすら歩いた。彼は直覺的に彼の「食を求め」道はこんなまだ

るつこいことではいけない思つたから、彼は遂に靜修庵せいしゅうあんの垣根の外へ行つた。

庵のまわりは水田であつた。白壁しろかべが新緑の中に突き出ししていた。後ろの低い垣の中に菜畑があつた。

阿Qはしばらくためらつていたが、あたりを見ると誰も見えない。そこで低い垣を這い上つて何首烏かしゅううの蔓つるを引張るとザラザラと泥が落ちた。阿Qは顫える足を踏みしめて桑の樹に攀よじ昇り、畑中はたなかへ飛び下りると、そこは繁りに繁つていたが、老酒ラオチユも饅頭も食べられそうなもの一つもない。西の垣根の方は竹藪で、下にたくさん筍たけのこが生えていたが生憎ナマで役に立たない。そのほか菜種があつたが実を結び、芥子菜からしなは花が咲いて、青菜は伸び過ぎていた。

阿Qは試験に落第した文童のような謂れなき屈辱を感じて、

ぶらぶら園門の側そばまで来ると、たちまち非常な喜びとなった。これは明かに大根畑だ。彼がしゃがんで抜き取ったのは、一つごく丸いものであったが、すぐに身をかがめて帰つて来た。これは確かに尼ツちよのものだ。尼ツちよなんてものは阿Qとしては若草の屑のように思っているが、世の中の事は「一歩退しりぞいて考え」なければならん。だから彼はそそくさに四つの大根を引抜いて葉をむしり捨て著物の下まえの中に蔵しまい込んだが、その時もう婆ばばの尼は見つけていた。

「おみどふ（阿弥陀仏）、お前はなんだつてここへ入つて来たの、大根を盗んだね……まあ呆れた。罪作りの男だね。おみどふ……」

「俺はいつお前の大根を盗んだえ」阿Qは歩きながら言った。

「それ、それ、それで盗まないというのかえ」と尼は阿Qの懐

ろをさした。

「これはお前の物かえ。大根に返辞をさせることが出来るかえ。お前……」

阿Qは言いも完おわらぬうちに足をもちやげて馳かけ出した。追っ馳かけて来たのは、一つのすこぶる肥大くろいぬの黒狗で、これはいつも表門の番をしているのだが、なぜかしらんきようは裏門に来ていた。黒狗はわんわん追いついて来て、あわや阿Qの腿ももに噛みつきそうになったが、幸い著物の中から一つの大根がころげ落ちたので、狗は驚いて飛びしきった。阿Qは早くも桑の樹にかじりつき土塀を跨いだ。人も大根も皆垣かきの外へころげ出した。狗は取残されて桑の樹に向つて吠えた。尼は念仏を申まおした。

尼が狗をけしかけやせぬかと思つたから、阿Qは大根を拾ついでう序ついでに小石を掻き集めたが、狗は追いかけても来なかつた。そこ

彼は石を投げ捨て、歩きながら大根を嚙かじつて、この村もいよいよ駄目だ、城内に行く方がいと想おもつた。

大根を三本食つてしまふと彼は已すでに城内行ゆきを決行した。

第六章 中興から末路へ

阿Qが再び未荘に現われた時はその年の中秋節が過ぎ去つたばかりの時だ。人々は皆おツたまげて、阿Qが帰つて来たと言つた。そこで前の事を回想してみると、彼はいつも城内から帰つて来ると非常な元気で人に向つて吹聴したもんだが、今度は決してそんなことはなかつた。ひよつとすると、彼はお廟みやの番人に話したかもしれない、未荘のしきたりでは趙太爺と錢太爺ともう一人秀才しゅうさいだんな太爺が城内に行ゆけば問題になるだけで、偽毛唐で

さえも物の数にされないのだから、いわんや阿Qにおいてをやだ。だから番人の親爺も彼のために宣伝するはずもないのに、未荘の人達がどうして知っていたのだらう。

だが阿Qの今度の帰りは前とは大おおに違っていた。確かにはなはだ驚異の値打があつた。

空の色が黒くなつて来た時、彼は酔眼朦朧すいがんもうろうとして、酒屋の門

前に現われた。彼は櫃台デスクの側へ行つて、腰の辺から伸した手に

一杯握つていたのは銀と銅。櫃台デスクの上にざらりと置き、「現金

だぞ、酒を持って来い」と言つた。見ると新しい袷を着て、腰

の辺には大搭連おおどうらんがどつしりと重みを見せ、帯紐が下へさがつて

ゆみなりゆみなりなりせんなりせんの弓状の弧線をなしている。

未荘の仕来りとして誰でもちよつと目覚ましい人物を見出した時、侮るよりもまず敬うのである。現在これが明かに阿Qで

あると知りながら破れ袷の阿Qとは別々である。古人の言葉に「たとい二三日の間でも別れた人に逢った時には目を見張つてその特徴を見出さなければならん」といつている。そういうわけで、ボーイも番頭も見ず知らずのそこらの人も、一種の疑いを持ちながら自然と敬いの態度を現わした。

番頭はまず合点して話しかけた。

「ほう阿Q、お前さん、帰つておいでだね」

「帰つて来たよ」

「景気がいいねえ。お前さんは——にいたの……」

「城内に行つていた……」この一つのニウスは二日目に未荘じゅうに伝わった。人々はみな、現金と新しい袷を持っている阿Qの中興史を聴きたく思った。そういうわけで、酒屋の中でも茶館の中でも廟の軒下でも、皆だんだんに探りを入れて聴き出し

た。その結果阿Qは新奇の畏敬を得た。

阿Qの話では、彼は拳人太爺きよじんだんなの家のお手伝うちをしていた。この一節を聴いた者は皆かしまつた。この老爺だんなは姓を白はくといい城内切つての拳人であるから改めて姓をいう必要がない。拳人という話が出ればつまり彼である。これは未荘だけでそう言っているのではない、この辺百里の区域の内は皆そうであつた。人々はほとんど大抵彼の姓名を拳人老爺きよじんだんなだと思つていた。そのお方のお屋敷でお手伝てんしていたのはもちろん敬うべきことである。けれど阿Qの言うところにや、彼はもう行つてやる気はない。この拳人老爺は実に非常な「馬鹿者」だ。この話を聴いた者はみな歎息して嬉しがつた。阿Qは拳人老爺の家で働くような人ではないが、働かないのも惜しいこつた。

阿Qの話でみると、彼が帰つて来たのは城内の人が氣に入ら

ぬからであるらしい。これはつまり、チャンテン長凳（ながしょうぎ長床几）をデウテン条凳と
いうことや、葱の糸切を魚の中に入れたり、そのうえ近頃見つ
け出した欠点は、女の歩き方がいやにねじれてはなはだよくな
い。しかしまた大に敬服おおいすべき方面もある。早い話が未莊の田
舎者は三十二枚の竹牌（牌の目の二面を以て成立った牌）を打
つだけのこと、マーチャン麻將を知っている者は偽毛唐だけであるが、
城内では小さな餓鬼がきまでが皆よく知っている。なんだって偽毛
唐が、城内の十歳そこそこの子供の手の中に入ってしまったのか。
これこそ「小鬼が閻魔様と同資格で会見する」様なもので、聴
けば赤面の到りだ。「てめえ達は、首斬くびきりを見たことがあるめえ」
と阿Qは言った。「ふん、見てくれ、革命党を殺すなんておもし
れえもんだぜ」

彼は首をふると、ちようどまん中にいた趙司晨の顔の上に唾つばき

がはねかかった。この一言に皆の者はぞつとした。だが阿Qは一向平気であたりを見廻し、たちまち右手をあげて、折柄頸おりからくびを延して聴き惚れている王鬚のぼんのくぼを目蒐めがけて、打ちおろした。

「ぴしゃり！」

王鬚は驚いて跳び上り稲妻のような速力で頸を縮めた。見ていた人達は気味悪くもあり、おかしくもあつた。それからというものは王鬚の馬鹿野郎、ずいぶん長い間、阿Qの側そばへは近寄らなかつた。ほかの人達もまた同じようであつた。

阿Qはこの時、未荘の人の眼の中の見当では、趙太爺以上には見えないが、たいていおつかつの偉さくらいに思われていたといつても、さしたる語弊はなからう。

そうこうする中うちにこの阿Qの評判は、たちまち未荘の女部屋の

奥に伝わった。未荘では錢趙両家だけが大家たいけで、その他はたい
てい奥行が浅かった。けれども女部屋はつまり女部屋であるか
ら一つの不思議と言つてもいい。女どもは寄るとさわるときつ
とその話をした。鄒七嫂が阿Qの処から買った一枚のお納戸絹なんどぎぬ
の袴は古いには違いないが、たった九十仙だった。趙白眼の母
親も——一説には趙司晨の母親だということだが、それはどう
かしらん——彼女もまた一枚の子供用の真赤な瓦斯織がすおりの单衣物ひとえもの
を買ったが、まだちよつと手を通したばかりの物がたった三百
大錢だいせんの九二串さしであつた。

そこで彼等は眼を皿のようにして阿Qを見た。絹袴が無い時
には、絹袴の出物は無いかと彼に訊たずねてみたと思つた。瓦斯織ひとえの
单衣ひとえがほしい時には、瓦斯織の单衣の出物は無いかと彼に訊ね
てみたと思つた。今度は阿Qを見ても逃げ込まないで、かえつ

て阿Qのあとを追馳おいかけて、袖を引止めた。

「阿Q、お前はもつと外ほかに絹袴を持ってゐるだろう。え、無いつて。わたしは単衣物もほしいんだよ。あるだろう」

あとではこの様なことが、端近い女部屋から終ついに奥深い女部屋に伝わった。鄒七嫂は嬉しさの余り彼の絹袴を趙太太ちようたいたいの処へ持つて行つてお目利きをねがった。趙太太はまたこれを趙太爺に告げて一時すこぶる真面目になつて話をしたので、趙太爺は晚餐の卓上秀才太爺（息子）と討論した。阿Qは全くどうも少し怪しい。われわれの戸締もこれから注意しなければならんが、しかし彼の品物で、まだ買つてやつていいようなものがあるかもしれないと想つた。殊に趙太太は直段ねだんが安くて品物がいい皮の袖無しが欲しいと思つていた時だから、遂に家族は決議して鄒七嫂にたのんで阿Qをすぐに喚んで来いと言つた。かつこれ

がために第三の例外をひらいてこの晩特にしばらくあかり燈をつけることを許された。

油は残り少なくなったが阿Qはまだ到着しなかつた。趙家の内の者は皆待ち焦れて、欠伸をして阿Qのきまぐ気紛れを恨み、鄒七嫂のぐうたらを怨んだ。趙太太は春の一件があるので来ないかもしれないと心配したが、趙太爺は、そんなことはない、乃公がよべばきつと来ると思った。果して趙太爺の見識は高かつた。阿Qは結局鄒七嫂のあとへ跟いて来た。

「この人はただ無い無いとばかり言っているんですが、そんならじかに話してくれとわたしは言つたんです。彼は何とかいうにちがひありません。わたしも言います——」鄒七嫂は息をはずませていた。

「太爺！」阿Qは薄笑いしながらのきした簷下に立っていた。

「阿Q、お前、だいぶんお金を儲けて来たという話だが」と趙太爺はそろそろ近寄って阿Qの全身を目分量した。

「何しろ結構なこった。そこで……噂によるとお前は古著ふるぎをたくさん持つているそうだが、ここへ持つて来て見せるがいい……外ほかでもない、乃公も欲しいと思つてゐるんだ……」

「鄒七嫂にも話した通りですが、皆売切れしました」

「売切れた！」趙太爺の声は調子が脱はずれた。「どうしてそんなに早く売切れたのだ！」

「あれは友達のもので、品数もあんまり多くは無いのですが、少しばかり分けてやつたんです」

「そんなことを言つても、まだいくらかあるに違いない」

「たった一枚幕が残っております」

「幕でもいいかた持つて来てお見せ」と趙太爺は慌てて言った。

「そんな物はあしたでもいいや」趙太爺はさほど熱心でもなかった。「阿Q、これからなんでも品物がある時には、まず、乃公の処へ持つて来て見せるんだぞ」

「値段は決してほかの家うちよりすくなく出すことはない」秀才は言った。

秀才の奥さんはチラリと阿Qの顔を見て彼が感動したかどうかを窺うかがった。

「わたしは皮の袖無しが一枚欲しいのだが」と趙太は言った。

阿Qは応諾しながらも不承々々に出て行つたから、気にとめているかどうかしらん。これは趙太爺を非常に失望させ、腹が立つて気掛りで欠伸がとまってしまふくらいであった。秀才太爺も阿Qの態度に非常な不平を抱き、この「忘八蛋」ワンパダン警戒する必要がある。いつそ村役人に吩咐いひつけてこの村に置かないことにし

てやろうと言つたが、趙太爺は、そりや好よくないことだと思つた。そうすれば怨みを受けることになる。ましてああいうことをする奴は大概「老いたる鷹は、巢の下の物を食わない」のだから、この村ではさほど心配するには及ぶまい。ただ自分の家うちだけ夜の戸締を少々嚴重にしておけばいい。

秀才もこの「庭訓」には非常に感心してすぐに阿Q追放の提議を撤回てつかいし、また鄒七嫂にも言い含めて、決してこのようなことを人に洩はらしてくるな、と言つた。

けれど鄒七嫂は次の日あの藍袴を黒色に染め替えて阿Qの疑うべき節を言い布ふらして歩いた。確かに彼女は秀才の阿Q駆逐の一節を持ち出さなかつたが、これだけでも阿Qに取つては非常に不利益であつた。最先まっさきに村役人が尋ねて来て、彼の幕を奪つた。阿Qは趙太太に見せる約束をしたと言つたが、村役人は

それを返しもせずになお毎月何ほどかの附届つけとどけをしろと言つた。それから村の人も彼に對してたちまち顔付を改めた。疎略なことはするわけもないがかえつてはなはだ遠ざかる気分があつた。この気分は前に彼が酒屋の中で「ぴしやり」と言つた時の警戒とは別種のものであつた。「敬して遠ざかる」ような分子がずいぶん多おおまじつていた。

閑人の中には阿Qの奥底を根掘り葉掘り探究する者があつた。阿Qは包まず隠さず自慢らしく彼の經驗談をはなした。

阿Qは小さな馬の脚に過ぎなかつた。彼は垣の上にあがることも出来なければ、洞あなの中に潜ることも出来なかつた。ただ外に立つて品物を受取つた。ある晩彼は一つの包つつみを受取つて相棒がもう一度入ると、まもなく中で大騒ぎが始まつた。彼はおぞけをふるつて逃げ出し、夜どおし歩いて終に城壁を乗り越え未莊

に帰つて来た。彼はこんなことは二度とするものでないと誓つた。この弁明は阿Qに取つてはいつそう不利益であつた。村の人の阿Qに対して「敬して遠ざかる」ものは仕返しがこわいからだ、ところが彼はこれから二度と泥棒をしない泥棒に過ぎないのだ。してみると「これもまた畏るるに足らない」ものだつた。

第七章 革命

宣統三年九月十四日——すなわち阿Qが搭連を趙白眼に売つてやったその日——真夜中過ぎに一つの大きな黒苦くろとまの船が趙屋敷の河添いの埠頭に著いた。この船は黒暗くらやみの中に揺られて来た。村人はぐつすり寝込んでいたので、皆知らなかつた。出て行く

時は明け方近かったがそれがかえつて人目を引いた。こつそり調べ出した結果に拠ると、船は結局拳人老爺の船であると知れた。

この船はとりもなおさず大不安を未荘に運んでくれて、昼にもならぬうちに全村の人心は非常に動揺した。船の使命はもとより趙家の極秘であつたが、茶館や酒屋の中では、革命党が入城するので、拳人老爺がわれわれの田舎に避難して来たと、皆言つた。ただ鄒七嫂だけはそうとは言わず、あれは詰らぬガラクタ道具や檻ぼろ著物を入れた箱で拳人老爺が保管を頼んで来たが、趙太爺が突返してしまつたんですと言つた。実際拳人老爺と趙秀才はもとからあんまり仲のいい方ではないので、「しん身の泣き寄り」などするはずがない。まして鄒七嫂は趙家の隣にいるので見聞けんもんが割合に確実だ。だから大概彼女の言うことには

間違いない。

そういうものの、ようげん謠言はなかなか盛んだ。拳人老爺は自身来たわけではないが長い手紙を寄越して趙家と「仲直り」をしたらしい。趙太爺は腹の中が一変して、どうしても彼に悪い処がないと感じたので箱を預り、現に趙太太の床とこの下を塞いでいる。革命党のことについては、彼等はその晩城に入つて、どれもこれも白鉢巻、白兜で、すうせい崇正皇帝の白装束を著ていたという。

阿Qの耳朶の中にも、とうから革命党という話を聞き及んで、今年また眼まぢかに殺された革命党を見た。彼はどこから来たかしらん、四一種の意見を持つていた。革命党は謀反人だ、謀反人は俺はいやだ、にく悪むべき者だ、断絶すべき者だ、と一途にこう思つていた。ところが百里の間に名の響いた拳人老爺がこの様におそ懼れたときいては、彼もまたいささか感心させられずにはい

られない。まして村鳥のような未荘の男女が慌て惑う有様は、彼をしていつそう痛快ならしめた。

「革命も好よかろう」と阿Qは想った。

「ここらにいる馬鹿野郎どもの運命を革あらためてやれ。恨むべき奴等だ。憎むべき奴等だ……そうだ、乃公も革命党に入つてやろう」

阿Qは近来生活の費用に窘くるしみ内々かなりの不平があつた。おまけに昼間飲んだ空すき腹ばらの二杯の酒が、廻れば廻るほど愉快になつた。そう思いながら歩いてみると、身体がふらりふらりと宙に浮いて来た。どうした機はずみか、ふと革命党が自分であるように思われた。未荘の人は皆彼の俘虜とりことなつた。彼は得意のあまり叫ばずにはいられなかつた。

「謀反だぞ、謀反だぞ」

未莊の人は皆恐懼きょうくの眼付で彼を見た。こういう風な可憐な眼付は、阿Qは今まで見たことがなかった。ちよつと見たばかりで彼は六月氷を飲んだようにせいせいした。彼はいつそう元氣づいて歩きながら怒鳴った。

「よし、……乃公がやろうと思えばやるだけの事だ。乃公が氣に入つた奴は氣に入つた奴だ。」

タツタ、ヂヤンヂヤン。

後悔するには及ばねえ。酔うて錯あやまり斬ていけんている鄭賢弟。

後悔するには及ばねえ。ヤーヤー……

タツタ、ヂヤンヂヤン、ドン、ヂヤラン、ヂヤン。

乃公は鉄の鞭でてめえ達を叩きのめすぞ……」

趙家の二人の旦那と本家の二人の男は、表門の入口に立つて革命のことで大論判だいろっばんしていた。阿Qはそれに目も呉れず頭をも

ちやげてまつすぐに過ぎ去つた。

「ドンドン……」

「^{キュー}Qさま」と趙太爺はおずおずしながら小声で彼を喚びとめた。

「ヂャンヂャン」阿Qは彼の名前の下に、「さま」という字が繋がつて来ようとは、まさか思いも依らなかつた^五。これは外の話で自分と関係がないと思つたから、ただ「ドンチャン、ドンチャン、ヂャラン、ヂャンヂャン」と言つていた。

「Qさん」

「思切つてやつつけろ……」

「阿Q！」秀才は仕方なしにもとの通りにその名を喚んだ。

阿Qはようやく立ちどまつて首をかしげて訊いた。「なんだね」

「Qさま……当節は……」と趙太爺は口を切つたが、言い出す

言葉もなかつた。「当節は……素晴らしいもんだね」

「素晴らしいと？ あたりまえよ。何をしようが乃公の勝手だ」
「……Q、わしのような貧乏仲間は大丈夫だろうな」と趙白眼はこわごわ訊いた。革命党の口振りを探るつもりであつたらしい。

「貧乏仲間？ てめえは乃公より金があるぞ」阿Qはそう言いながらすぐに立去つた。

みんな萎れ返つて物も言わない。趙家の親子は家に入つて灯ともしごろまで相談した。趙白眼も家に帰るとすぐに腰のまわりの搭連をほどいて女房に渡し、六箱の中に蔵めた。

阿Qは一通りぶらぶら飛び廻つて土穀祠おいなりさまに帰つて来ると、もう酔よは醒めてしまつた。

その晩、みやぼん廟祝の親父も意外の親しみを見せて阿Qにお茶を薦

めた。阿Qは彼に二枚の煎餅をねだり、食べてしまおうと四十匁あまの蠟燭の剩り物を求めて燭台を借りて火を移し、自分の小部屋へ持って行ってひとり寝た。彼は言い知れぬ新しきと元気があつた。蠟燭の火は元宵げんしやう（正月）の晩のようにパチパチと撥ね迸はつたが、彼の思想も火のように撥ね迸ほとばしつた。

「謀反？ 面白いな……来たぞ来たぞ。一陣の白鉢巻、白兜、革命党は皆ダンビラをひっさげて鋼鉄の鞭、爆弾、大砲、菱形けんに七七尖った両刃の鎖鎌けん。土穀祠おいなりさまの前を通り過ぎて『阿Q、一緒に来い』と叫んだ。そこで乃公は一緒に行く、この時未莊の村鳥むらがらす、一群の男女こそは、いかにも気の毒千万だぜ。『阿Q、命だけはどうぞお赦ゆるし下さいまし』誰が赦してやるもんか。まず第一に死ぬべき奴は小Dと趙太爺だ。その外秀才もある。偽毛唐もある。……残る奴ばらは何本ある？ 王ワンなんて奴は残して

やるべき筋合の者だが、まあどうでもいいや……」

「品物は……すぐに入り込んで箱を開けるんだ。元宝、げんぼう銀貨、おみやハモスリンの著物……秀才婦人の寝台をまずこの廟の中へ移して、そのほか錢家の卓と椅子。あるいは趙家の物でもいい。自分は懐ろ手して小Dなどは顎でつかい、おい、早くやれ。愚図々々するとぶんなぐるぞ」

「趙司晨の妹はまずい。鄒七嫂の小娘は二三年たつてから話をしよう。偽毛唐の女房は辮子の無い男と寝てやがる、はッ、こいつはたちが好くねえぞ。秀才の女房は眼蓋まぶたの上に疵きずがある——しばらく逢わないが呉媽はどこへ行つたかしらんて……惜しいことにあいつ少し脚が太過ぎる」

阿Qは彼の胸算用がすっかり片づかぬうちにもう鼾をかいた。四十匁蠟燭は燃え残つて五分ほどになり、赤々と燃え上る火光かこう。

は、彼の開け放しの口を照した。

「すまねえ、すまねえ」阿Qはたちまち大声上げて起き上った。頭を挙げてきよろきよろあたりを見廻して四十匆蠟燭に目をつけると、すぐにまた頭をおろして睡ねむつてしまった。

次の日彼は遅く起きて往来に出てみたが、何もかも元の通りであった。彼はやっぱり肚が耗へつていた。彼は何か想つていながら想い出すことが出来なかつた。たちまち何かきまりがついたような風で、のそりのそりと大跨に歩き出した。そうして有耶無耶のうちに静修庵せいしゅうあんについた。

庵は春の時と同じような静けさであつた。白壁と黒門、彼はちよつと思案して前へ行つて門を叩いた。一疋いっぴぎの狗が中で吠えた。彼は急いで瓦のカケラを拾い上げ、もう一度前へ行つて、今度は力任せにぶつ叩いて黒門の上に幾つあばたも痘瘡が出来た時、

ようやく人の出て来る足音がした。

阿Qは慌てて瓦を持ちなおし馬のように足をふんばって、黒狗と開戦の準備をした。だが庵門はただ一すじの透間すきまをあけたのみで、黒狗が飛び出すことはないと見たので、近寄って行くゆと、そこに一人の老いたる尼がいた。

「お前はまた来たのか。何の用だえ」と尼は呆れ返っていた。

「革命だぞ。てめえ知っているか」と阿Qは口籠くちごもった。

「革命、革命とお言いだが、革命は一遍済んだよ。……お前達は何だつてそんな騒ぎをするんだえ」尼は眼のふちを赤くしながら言った。

「何だと？」阿Qは訝しゆぶかった。

「お前はまだ知らないのだね。あの人達はもう革命を済ましたよ」

「誰だ？」阿Qは更に訝った。

「秀才と偽毛唐さ」

阿Qは意外のことにぶつつかつてわけもなく面喰った。尼は彼の出鼻をへし折つて隙すかさず門を閉めた。阿Qはすぐに押し返したが固く締つていた。もう一度叩いてみたが返辞もしない。

これもやつぱりその日の午前中の出来事だった。機を見るに敏なる趙秀才は革命党が城内に入ったと聞いて、すぐに辮子を頭の上に巻き込み、今までずっと仲悪なかわるで通したあの錢毛唐せんけとうの処へ御機嫌伺いに行った。これは「みなともに維これ新たななり」の時であるから、彼等は話が弾んで立ちどころに情意投合の同志となり、互に相約して革命に投じた。

彼等はいろいろ想い廻して、やっと想い出したのは靜修庵の中りゅうはいの「皇帝万歳万、万歳！」の一つの竜牌だ。これこそすぐに

も革擲^{かくてぎ}すべきものだと思つたから、二人は時を移さず靜修庵に行くと、老いたる尼が邪魔をしたので、彼等は尼を満州政府と見做し、頭の上に少からざる棍棒と鉄拳を加えた。尼は彼等が歸つたあとで気を静めてよく見ると、竜牌はすでに已^{すで}に碎けて地上に横たわっているのはもつともだが、觀音様の前にあつた一つの宣徳^{せんとくろ}炉が見当らないのが不思議だ。

阿Qはあとでこの事を聞いてすこぶる自分の朝寢坊を悔んだ。それにしても彼等が阿Qを誘わなかつたのは奇ツ怪千万である。阿Qは一步^{しりぞ}退いて考えた。

「彼等が、今まで知らずにいるはずはない。阿Qは已に革命党に投じているのじゃないか」

第八章 革命を許さず

未荘の人心は日々に安静になり、噂に抛れば革命党は城内に入つたが、何も格別變つたことがない。知県様ちけんはやつぱり元の位置にいて何か名目が變つただけだ。拳人老爺は何になつたか——これ等の名目は未荘の人には皆わからなかつた。——お上お上が兵隊を連れて来ることは、これも前からいつもあることで、格別不思議なことでもないが、ただ一つ恐ろしいのは、ほかに幾らか不良分子が交まじつていて内部の擾乱じょうらんを計つていることだ。そうして二言目には手を動かして辮子を剪きつた。聴けば隣村の通い船を出す七斤は途中で引摺ひきずまって、人間らしくないような体裁にされてしまつたが、それさえ大した恐怖の数に入らない。未荘の人は本来城内に行くゆことは少いの、たまたま行くゆ用事があつても差控えてしまうから、この危険にぶつかる者も少い。

阿Qも城内に行つて友達に逢いたいと思つていたが、この話を聞くとやめなければならぬ。

だが未莊の人も改革なしでは済まされなかつた。幾日の後、辮子を頭に巻込む者が逐漸ちくぜん増加した。手ツ取り早く言うが一番最初が茂才もさいちゆう公だ。その次が趙司晨と趙白眼だ。後では阿Qだ。これがもし夏ならば、辮子を頭の上に巻込み、あるいは一つのかたまりにするのはもとより何も珍らしい事ではないが、今は秋の暮で、この特別の歳時記が行われたのは、辮子を巻込んだ連中にとつては非常な英断と言わなければならぬ。未莊としてはこれもまた改革の一つでないということとは出来ない。

趙司晨は頭の後ろを空坊主にして歩いた。これを見た人は大きな声を出して言った。

「ほう、革命党が来たぞ」

阿Qは非常に羨しく思った。彼はとうから秀才が辮子をわがねたというニウスを聞いていたが、自分がその様な事をしていいかという事について少しも思い及ばなかった。現在趙司晨がこうなつてみると、急に真似てみたくなつて実行の決心をきめた。彼は一本の竹箸に辮子を頭の上にわがね、しばらくためらつていたが、思切つて外へ出た。

彼が往来に出ると、人は皆彼を見るには見るが何にも言わない。阿Qは初め不快に感じてあとになるとだんだん不平が高じて来た。彼は近頃怒りツぽくなつた。実際彼の生活は謀叛前よりはよほど増しだ。人は彼を見ると遠慮して、どこの店でも現金は要らないという、だが阿Qは結局少からざる失望を感じた。もう革命を済ましたのに、こんなわけはないはずだ。そうして一度小Dを見るといよいよ彼の肚の皮が爆発した。

小Dもまた頭の上に辮子をわがねた。しかもかつあきらかに一本の竹箸を挿していた。阿Qはこんなことを彼が仕出かそうとは全く思いも依らぬことだった。自分としてもまた彼がこのような事するのは決して許されない。小Dは何者だろう？ 阿Qはすぐにも小Dに引搦んで、彼の竹箸を捻じ折り、彼の辮子をほかして、うんと横面を引ツぱたいて、彼が生年月日時の八字を忘れ、図々しくも革命党に入つて来た罪を懲らしめてやりたくなつて溜らなくなつたが、結局それも大目に見て、ベツと唾を吐き出し、ただ睨みつけていた。

この幾日の間、城内に入ったのは偽毛唐一人だけであつた。趙秀才は箱を預つたことから、自身拳人老爺を訪問したくは思つていたが、辮子を剪られる危険があるので中止した。彼は一封の「黄傘格」の手紙（かきしふびき）（柿渋引の方罫紙？）を書いて、偽毛唐に

託して城内に届けてもらい、自分を自由党に紹介してくれと頼んだ。偽毛唐が帰つて来た時には、秀才は四元の銀を払つて胸の上に銀のメダルを掛けた。未荘の人は皆驚嘆した。これこそ柿油党すいゆうたん（自由と同音、柿渋かきしぶは防水のため雨傘に引く、前の黄傘格きしやうに対す）の徽章かぎりんで翰林かんりんを抑えつけたんだと思つていた。趙太爺にわかは俄にわかに肩身が広くなり倅こが秀才あたに中あつた時にも増して目障りの者が無い。阿Qを見ても知らん顔をしている。

阿Qは不平の真最中に時々零落を感じた。銀メダルの話を聴くと彼はすぐに零落の真因を悟つた。革命党になるのには、投降すればいいと思つていたが、それが出来ない。辮子を環わがねればいいと思つたがそれも駄目だ。第一、革命党に知合がなければいけないのだが、彼の知つている革命党はたった二つしか無かつた。その一つは城内でバサリとやられてしまつた。今はた

だ偽毛唐一人を知っているだけで、その毛唐の処へ、相談に行くより外は無かった。

錢家の大門は開け拡げてあつた。阿Qは、おっかなびつくり入つて行つた。彼は中へ入りかけて非常に驚いたのは、偽毛唐がちょうど広場のまん中に突立つて、真黒な洋服を着て、銀メダルを附けて、手にはかつて阿Qを懲らしめたステッキを持つて、一尺余りの辮子を披ひらいて方の上に振り下げ、まるで蓬々ほうほう髪がみの劉海りゅうはい仙人のような恰好で立つていたのだ。向き合つて立つていたのは、趙白眼の外三人の閑人で、ちょうど今恭々しくお話を伺つてゐるところだ。

阿Qはこつそり近寄つて趙白眼の後ろに立ち、心の中ではお引立に預かろうと思つてゐるんだが、さて何と言つたらいいものか、言い出す言葉を知らなかつた。

彼を偽毛唐というのはもとより好くないことだ。西洋人も穏かでない。革命党も穏かでない。洋先生やんしいさんといえはあるいはいいかもしれない。

洋先生は眼を白黒して、ちようど講義の真最中であつたから、阿Qに眼も呉れない。

「乃公はせつかちだから顔を見るとすぐに言つた。洪君こう！ われわれは著手ちやくしゆしよう。しかし彼は結局ノの」と言つた。これは洋語だからお前達には分らない。そうでなければもつと早く成功したんだぞ。とにかく、これは彼が大事を取つて仕事をした方面なんだ。彼等は再三再四湖北に行つてくれと乃公に頼んだが、乃公はそれでも承知しないくらいだ。誰がこんな小つぽけな皇城の中で事を起そうと願う奴があるもんか……」

「えーと、こーつ」阿Qは彼の話が途切れたひまに精一杯の勇氣

を振りふりおこして口をひらいた。だが、どうしたわけか洋先生と、彼を喚ぶことが出来なかつた。

話を聴いていた四人の者は喫驚びつくりして阿Qの方を見た。洋先生もようやく彼に目をとめた。

「何だ」

「わたし……」

「出て行け」

「わたしも……に入りたい」

「生意気いうな。ころがり出ろ」と洋先生は人泣かせ棒を振上げた。

趙白眼と閑人は口を揃えて怒鳴つた。

「先生がころがり出ると被仰おっしやるのに、てめえは肯きかねえのか」

阿Qは頭の上に手を翳かざして、覚えず知らず門外に逃げ出した。

洋先生は追い馳けても来なかつた。阿Qは六十歩余りも馳け出してようやく歩みを弛ゆるめ心の中で憂愁を感じた。洋先生が彼に革命を許さないとすると、外に仕様がなない。これから決して白鉢巻、白兜の人が彼を迎えに来るといのぞ望を起すことが出来ない。彼が持っていた抱負、志向、希望、前途がただ一筆で棒引されてしまった。閑人のお布ふれが行届ゆきとどいて、小D、王鬚などに話の種を呉れたのは、やつぱり今度の事であつた。

彼はこのような所在なさを感じたことは今まで無いように覺えた。彼は自分の辮わが子を環わねたことについて九無意味に感じたらしく、侮蔑をしたくなつて復讐かんがえの考から、立ちどころに辮わが子を解きおろそうとしたが、それもまた遂にそのままにしておいた。彼は夜になつて遊びに出掛け、二杯の酒を借りて肚の中に飲みおろすと、だんだん元気がついて来て、思想の中に白鉢巻、白

兜のカケラが出現した。

ある日のことであつた。彼は常例に依り夜更けまでうろつき廻つて、酒屋が戸締をする頃になつてようやく土穀祠おひなりさまに帰つて来た。

「パン、パン」

彼はたちまち一種異様な音声をきいたが爆竹では無かつた。一たい彼は賑やかな事が好きで、下らぬことに手出しをしたが質たちだから、すぐに暗やみの中を探つて行くと、前の方にいささか足音がするようであつた。彼は聴耳ききみみ立てていると、いきなり一人の男が向うから逃げて来た。彼はそれを見るとすぐに跡に跟着いて馳け出した。その人が曲ると阿Qも曲つた。曲つてしまふとその人は立ちどまつた。阿Qもまた立ちどまつた。阿Qは後ろを見ると何も無かつた。そこで前へ向つて人を見ると小Dで

あつた。

「何だ」阿Qは不平を起した。

「趙……趙家がやられた。一〇掠奪……」小Dは息をはずませていた。

阿Qも胸がドキドキした。小Dはそう言つてしまふと歩き出した。阿Qはいつたん逃げ出したものの、結局「その道の仕事をやった」事のある人だから殊の外度胸が据すわつた。彼は路角みちかどに蹩いざり出て、じつと耳を澄まして聴いていると何だかざわざわしているようだ。そこでまたじつと見澄ましていると白鉢巻、白兜の人が大勢いて、次から次へと箱を持出し、器物を持出し、秀才夫人の寧波寢台ニンポウねだいをもち出したようでもあつたがハッキリしなかつた。

彼はもう少し前へ出ようとしたが両脚が動かなかつた。

その夜は月が無かつた。未莊は暗黒の中に包まれてはなはだしんとしていた。しんとしていて羲皇ぎきうの頃のような太平であつた。阿Qは立つてゐるうちにじれつたくなつて来たが、向うではやはり前と同じように、往つたり来たりしてゐるらしく、箱を持ち出したり器物を持ち出したり、秀才夫人ニシボウの寧波寢台を持ち出したり……

持ち出したと言っても、彼は自分でいささか自分の眼を信じなかつた。それでも一步前へ出ようとはせず、結局自分の廟おみやの中に歸つて来た。

おいなりさま土穀祠の中は、いつそうまつ闇くらだつた。彼は大門をしつかり締めて、手探りで自分の部屋に入り、横になつて考えた。こうして気を静めて自分の思想の出どころを考えてみると、白鉢巻、白兜の人は確かに著ついたが、決して自分を呼び出しには来なかつ

た。いろんないい品物は運び出されたが、自分の分け前はない。これは全く偽毛唐が悪いのだ。彼は乃公に謀叛を許さない。謀叛を許せば、今度乃公の分け前がないことはないじゃないか？阿Qは思えば思うほど、イライラして来て耐え切れず、おもうさま怨んで毒々しく罵った。

「乃公には謀叛を許さないで、自分だけが謀叛するんだな。馬鹿、偽毛唐！ よし、てめえが謀叛する。謀叛すれば首が無いぞ。乃公はどうしても訴え出てやる。てめえが県内に引廻されて首の無くなるのを見てやるから覚えていろ。一家一族皆殺しだ。すぱり、すぱり」

第九章 大団円

趙家が掠奪に遭つてから、未莊の人は大抵みな小気味よく思いながら恐慌を来した。阿Qもまたいい気味だと思ひながら内々恐れていると、四日過ぎての真夜中に彼はたちまち城内につまみ出された。その時はしんの闇夜で、一隊の兵士と一隊の自衛団と一隊の警官と五人の探偵がこつそり未莊に到着して闇に乗じて土穀祠を囲み、門の真正面に機関銃を据えつけたが、阿Qは出て来なかつた。

しばらくの間、様子が皆目知れないので、彼等は焦らずにはいられなかつた。そこで二万錢の賞金を懸けて二人の自衛団が危険を冒してやつとこさと垣根を越えて、内外相応じて一斉に闖入し、阿Qを掴み出して廟の外の機関銃の左側に引据えた。

その時彼はようやくハッキリ眼が醒めた。

城内に著いた時には已に正午であつた。阿Qは自分で自分を

見ると、壊れかかったお役所の中に引廻され、五六遍曲ると一つの小屋があつて、彼はその中へ押し込められた。彼はちよつとよろけたばかりで、丸太を整理した門が彼の後ろを閉じた。その他の三方はキツタテの壁で、よく見ると室へやの隅にもう二人いた。

阿Qはずいぶんどぎまぎしたが、決して非常な苦悶ではなかつた。それは土穀祠おいなりさまの彼の部屋はこの部屋よりも決してまさることは無かつたからだ。そこにいた二人は田舎者らしく、だんだん懇意になつて話してみると、一人は拳人老爺の先々代に滞つていた古い地租の追徴であつた。もう一人は何のこつたか好く解らなかつた。彼等は阿Qにわけを訊くと、阿Qは臆面なく答えた。「乃公は謀叛を起そうと思つたからだ」

阿Qは午後から丸太の門の外へ引きずり出され大広間に行つ

た。正面の高いところにくりくり坊主の親爺が一人坐していた。阿Qはこの人は坊さんかもしれないと思つて、下の方を見ると、兵隊が整列して、両側に長い著物を著た人が十幾人も立っていた。その中にはイガ栗坊主の親爺もいるし、一尺ばかり髪を残して後ろの方に披さばいていた偽毛唐によく似た奴もあつた。彼等は皆同じような仏頂面で目を怒らして阿Qを見た。阿Qはこりやあきつとお歴々に違ひないと思つたから、膝の関節が自然と弛んでべたりと地べたに膝をついた。

「立つて物を言え、膝を突くな」と長い著物の人は一斉に怒鳴つた。

阿Qは承知はしているが、どうしても立つてゐることが出来ない。我れ知らず身体からだが縮こまつてその勢いきおいに押されて揚句あげくの果ては膝を突いてしまう。

「奴隷根性！……」と長い著物を著た人はさげすんでいたようだが、その上立てとも言わなかった。

「お前は本当にやっただらうな。ひどい目に遭わぬうちに言つてしまえ。乃公はもうみんな知っているぞ。やっただらそれでいい。放してやる。」とくりくり坊主の親爺は、阿Qの顔を見詰めて物柔かにハッキリ言つた。

「やっただらう」と長い著物を著た人も大声で言つた。

「わたしはとうから……来ようと思つていたんです……」阿Qはわけも分らず一通り想い廻して、やつとこんな言葉をキレギレに言つた。

「そんならなぜ来なかつたの」と親爺はしんみりと訊いた。

「偽毛唐が許さなかつたんです」

「うそ嘘を吐け。この場になつてもう遅い。お前の仲間は今どこに

いる」

「何でげす？」

「あの晩、趙家を襲った仲間だ」

「あの人達は、わたしを喚びに来ません。あの人達は、自分で運び出しました」阿Qはその話が出ると憤々ふんぷんした。

「持ち出してどこへ行つたんだ。話せば赦ゆるしてやるよ」親爺はまたしんみりとなつた。

「わたしは知りません。……あの人達はわたしを呼びに来ません」

そこで親爺は目遣めつかいをした。阿Qはまた丸太格子の中に抛ほうり込まれた。彼が二度目に同じ格子の中から引きずり出されたのは二日目の午前であつた。

大広間の模様は皆もとの通りで、上座には、やはりくりくり

坊主の親爺が坐して、阿Qは相変らず膝を突いていた。

親爺はしんみりときいた。「お前はほかに何か言うことがあるか」

阿Qはちよつと考えてみたが、別に言う事もないので「ありません」と答えた。

そこで一人の長い著物を著た人は、一枚の紙と一本の筆を持つて、阿Qの前に行き、彼の手の中に筆を挿し込もうとすると、阿Qは非常におつたまげて魂も身に添わぬくらいに狼狽した。彼の手が筆と関係したのは今度が初めてで、どう持っていていいか全くわからない。するとその人は一箇所を指して花押の書き方を教えた。

「わたし、……わたしは……字を知りません」阿Qは筆をむんずと掴んで愧かしそうに、恐る恐る言った。

「ではお前のやりいいように丸でも一つ書くんだね」

阿Qは丸を書こうとしたが筆を持つ手が顫えた。そこでその人は彼のために紙を地上に敷いてやり、阿Qはうつぶしになって一生懸命に丸を書いた。彼は人に笑われちゃ大変だと思つて正確に丸を書こうとしたが、悪むべき筆は重く、ガタガタ顫えて、丸の合せ目まで漕ぎつけると、ピンと外へ脱はずれて瓜のような恰好になった。

阿Qは自分の不出来を愧かしく思っていると、その人は一向平気で紙と筆を持ち去り、大勢の人は阿Qを引いて、もとの丸太格子の中に抛り込んだ。

彼は丸太格子の中に入れても格別大して苦にもしなかつた。彼はそう思った。人間の世の中は大抵もとから時に依ると、抓み込まれたり抓み出されたりすることもある。時に依ると紙

の上に丸を書かなければならぬこともある。だが丸というものがあつて丸くないことは、彼の行いの一つの汚点だ。しかしそれもまもなく解つてしまった、孫子であればこそ丸い輪が本当に書けるんだ。そう思つて彼は睡りに就いた。

ところがその晩拳人老爺はなかなか睡れなかつた。彼は少尉殿と仲たがいをした。拳人老爺は臍品の追徴ぞうひんが何よりも肝腎だと言つた、少尉殿はまず第一に見せしめをすべしと言つた。少尉殿は近頃一向拳人老爺を眼中に置かなかつた。卓つくえを叩き腰掛を打つて彼は説いた。

「一人を槍玉に上げれば百人が注意する。ねえ君！ わたしが革命党を組織してからまだ二十日はつかにもならないのに、掠奪事件が十何件もあつてまるきり挙らない。わたしの顔がどこに立つ？ 罪人が挙つても君はまだ愚図々々ぐずぐずしている。これが旨く行かん

と乃公の責任になるんだよ」

拳人老爺は大おおいに窮したが、なお頑固に前説を固持して贓品の追徴をしなければ、彼は即刻民政の職務を辞任すると言った。けれど少尉殿はびくともせず、「どうぞ御随意になさいませ」と言った。

そこで拳人老爺はその晩とうとうまんじりともしなかつたが、翌日は幸い辞職もしなかつた。

阿Qが三度目に丸太格子から掴み出された時には、すなわち拳人老爺が寝つかれない晩の翌日の午前であつた。彼が大広間に来ると上席にはいつもの通り、くりくり坊主の親爺が坐つていた。阿Qもまたいつもの通りの膝を突いて下にいた。親爺はいとも懇ねんていろに尋ねた。「お前はまだほかに何か言うことがあるかね」

阿Qはちよつと考えたが別に言うこともないので、「ありません」と答えた。

長い著物を著た人と短い著物を著た人が大勢いて、たちまち彼にしろかたきん白金巾の袖無しを著せた。上に字が書いてあつた。阿Qははなはだ心苦しく思つた。それは葬式の著物のようで、葬式の著物を著るのはえんき縁喜が好くないからだ。しかしそう思うまもなく彼は両手を縛られて、ずんずんお役所の外へ引きずり出された。

阿Qは屋根無しの車の上にかつ昇ぎあげられ、短い著物の人が幾人も彼と同座して一緒にいた。

この車は立ちどころに動き始めた。前には鉄砲をかついだ兵隊と自衛団が歩いてゐた。両側には大勢の見物人が口を開け放して見ていた。後ろはどうなつてゐるか、阿Qには見えなかつ

た。しかし突然感じたのは、こいつはいけねえ、首を斬られるんじやねえか。

彼はそう思うと心が顛倒てんとうして二つの眼が暗くなり、耳朶の中がガーンとした。気絶をしたようでもあったが、しかし全く気を失ったわけではない。ある時は慌てたが、ある時はまたかえつて落著おちついた。彼は考えているうちに、人間の世の中はもともとこんなもんで、時に依ると首を斬られなければならないこともあるかもしれない、と感じたらしかつた。

彼はまた見覚えのある路を見た。そこで少々変に思った。なぜお仕置ゆに行かないのか。彼は自分が引廻しになつて皆に見せしめられているのを知らなかつた。しかし知らしめたも同然だつた。彼はただ人間世界はもともと大抵こんなもんで、時に依ると引廻しになつて皆に見せしめなければならぬものであるか

もしれない、と思つたかもしれない。

彼は覚醒した。これはまわり道してお仕置場にゆく路だ。これはきつとずばりと首を刎はねられるんだ。彼はガツカリしてあたりを見ると、まるで蟻のように人が附いて来た。そうして図らずも人ごみの中に一人の呉媽を発見した。ずいぶんしばらくだった。彼女は城内で仕事をしていたのだ。彼はたちまち非常な羞恥を感じて我れながら気が滅入ってしまった。つまりあの芝居の歌を唱うたう勇氣がないのだ。彼の思想はさながら旋風のように、頭の中を一まわりした。「若寡婦わかごけの墓参り」も立派な歌ではない。「竜虎図」の「後悔するには及ばぬ」も余りつまらな過ぎた。やっぱり「手に鉄鞭てつべんを執つてキサマを打つぞ」なんだろう。そう思うと彼は手を挙げたくなつたが、考えてみるとその手は縛られていたのだ。そこで「手に鉄鞭を執り」さえも唱となえ

なかつた。

「二十年過ぎればこれもまた一つのものだ……」阿Qはゴタゴタの中で、今まで言ったことのないこの言葉を「師匠も無しに」半分ほどひり出した。

「好!!!」と人ごみの中から狼の吠声のような声が出た。

車は停まらずに進んだ。阿Qは喝采の中に眼玉を動して呉媽を見ると、彼女は一向彼に眼を止めた様子もなくただ熱心に兵隊の背の上にある鉄砲を見ていた。

そこで、阿Qはもう一度喝采の人を見た。

この刹那、彼の思想はさながら旋風のように脳裏を一廻りした。四年前ぜんに彼は一度山下で狼に出遇であった。狼は附かず離れず跟そいて来て彼の肉を食くらおうと思つた。彼はその時全く生きている空そは無かつた。幸い一つの薪割を持つていたので、ようやく

元気を引起し、未莊まで持ちこたえて来た。これこそ永久に忘れぬ狼の眼だ。臆病でいながら鋭く、鬼火のようにキラめく二つの眼は、遠くの方から彼の皮肉を刺し通すようでもあった。ところが彼は今まで見た事もない恐ろしい眼付を更に発見した。鈍くもあるが鋭くもあつた。すでに彼の話を咀嚼したのみならず、彼の皮肉以上の代物を噛みしめて、附かず離れずとこしえに彼の跡にくつついて来る。これ等の眼玉は一つに繋がつて、もうどこかそこらで彼の靈魂に咬みついているようでもあつた。

「助けてくれ」

阿Qは口に出して言わないが、その時もう二つの眼が暗くなつて、耳朶の中がガアンとして、全身が木端微塵に飛び散つたように覺えた。

当時の影響からいうと最も大影響を受けたのは、かえって拳人老爺であつた。それは盗られた物を取返すことが出来ないで、家じゅうの者が泣き叫んだからだ。その次に影響を受けたのは趙家であつた。秀才は城内へ行つて訴え出ると、革命党の不良分子に辮子を剪られた上、二万文の懸賞金を損したので家じゅうで泣き叫んだ。その日から彼等の間にだんだん遺老氣質が發生した。

輿論の方面からいうと未莊では異議が無かつた。むろん阿Qが悪いと皆言つた。ぴしやりと殺されたのは阿Qが悪い証拠だ。悪くなければ銃殺されるはずが無い！しかし城内の輿論はかえつて好くなかつた。彼等の大多数は不満足であつた。銃殺するのは首を斬るより見ごたえがない。その上なぜあんなに意気地のない死刑犯人だつたらう。あんなに長い引廻しの中に歌の

一つも唱うたわないで、せつかく跡あとに跟ついてて見たことが無駄骨むだぼねになつた。

(一九二二年十二月)

後註

- 一 「乃公は」は底本では「乃公は」
- 二 「姐己」は底本では「姐己」
- 三 「水田であつた」は底本では「水あ田でつた」
- 四 「、」は底本では「。」
- 五 「依らなかつた」は底本では「依らなかつた」
- 六 「渡し、」は底本では「渡し」

- 七 「菱形に」は底本では「菱形に」
- 八 「銀貨、」は底本では「銀貨」
- 九 「ことについて」は底本では「ことついて」
- 一〇 「。。」は底本では「。。。」

底本：「魯迅全集」改造社

1932年（昭和7年）11月18日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「彼奴→あいつ 或→ある 或は→あるいは 些か・聊か→いささか
一層→いっそう 一旦→いったん 愈々→いよいよ 所謂→いわゆる
於いて→おいて 大方→おおかた 却・反って→かえって か知ら→
かしら 且つ→かつ 曾て→かつて 可成り→かなり 屹度→きつと
位→くらい 此奴→こいつ 極く→ごく 極々→ごくごく 此処→
ここ 此の→この 此処→ここ 之→これ 偕て→さて 宛ら→さな
がら 併し→しかし 而も→しかも 然らば→しからば 従って→し
たがって 暫く→しばらく 仕舞う→しまう 随分→ずいぶん 頗る
→すこぶる 即ち→すなわち 折角→せっかく 是非とも→ぜひとも
其→その 大分→だいぶ・だいぶん 沢山→たくさん 丈け→だけ
唯・只→ただ 但し→ただし 忽ち→たちまち 例如ば→たとえば 給
え→たまえ 為→ため 丁度→ちょうど 一寸→ちよつと 就いて→つ
いて 詰り→つまり て置→てお て呉れ→てくれ て見→てみ て貰
→てもら 何処→どこ 兎に角→とにかく 尚お・猶お→なお 猶更→
なおさら 中々→なかなか 許り→ばかり 筈→はず 甚だ→はなはだ
程→ほど 殆んど・幾んど→ほとんど 正に→まさに 況して→まし
て 先ず→まず 又・亦→また 未だ→まだ 儘→まま 丸切り→まる
きり 丸で→まるで 若し→もし 勿論→もちろん 尤も→もつとも
矢張り→やはり 已むを得ず→やむをえず 漸く→ようやく 余ッ程→
よッほど 余程→よほど 俺→わし」

ただし、一部のカタカナ表記については、あらためていません。

※底本に混在している「灯」「燈」はそのままにしました。

※底本は総ルビですが、一部を省きました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（山本貴之）